王（後の大正天皇）が「賓日館」に長期逗留され、二見浦は一級の保養地として全国的に認められるようになる。

明治 38 年（1905）に入ると、江村の海岸沿いにある松林を開拓して新道が作られ、潮湯治の旅館が急遽進出し、現在の二見興玉神社の表参道として旅館街を形成することになる。また、内務省からは日露戦争の傷病兵を療養先として受け入れるようにとの内示があり、このことが旅館街形成の追い風ともなった。

昭和初期には、現在も見られる修学旅行が始まり、昭和 16 年（1941）の太平洋戦争勃発まで、観光地・二見浦は一般観光客と修学旅行客で隆盛を極めたのである。

３　社会的環境

二見浦は、伊勢神宮が五十鈴川上の地に鎮座したとき、倭姫命が天照大神の御膳の御贄を献上する地を定めるため、この地にも立寄り、御食島を定めたという伝承を持つ。古くから伊勢神宮の神領に組み込まれ、二見御厨は「ニ宮朝夕御饌料所」として、堅塩を調進しており、現在も打越浜には「御塩殿」がある。

古代から二見浦を訪れる文人は多かったが、神宮参詣との関係は明らかでない。立石崎のことを江村では通常「垢離場（こりば）」と呼んでおり、神仏に参拝するとき、水を浴びて心身の穢れをとる場とされていた。参宮者の沐浴潔斎に便宜をはかるため、貞享３年（1686）には、立石崎に茶屋を設けた。明治 28 年（1895）刊行の『神都名勝誌』には、「およそ、諸国より神宮に参拝する者は、必ず朝熊嶽に登覧し、二見浦に逍遥せざるはなし」とされ、「朝熊かけねば片参り」とも歌われ、遅くともこの頃までには、参宮の新しい形態が成立していたものと思われる。

ところで、二見興玉神社がこの地に創設されたのは、明治 30 年（1897） 6 月 18 日と古くはない。江村・大江寺の鎮守神、興玉社を神遷したもので、はじめは茶屋が氏神とした三宮神社の境内社であったが、明治 43 年（1910） 3 月末日をもって両社を合祀、無格社・二見興玉神社と改称した。

立石は、海中の興玉神石及び日の出の遥拝所として結界の石であった。立石に注連縄が張られた時期については不明であるが、永仁３年（1295）の『伊勢新名所絵歌合』には、注連縄はみられない。現在、男岩と女岩を結ぶ大注連縄を張り替える「夫婦岩大注連縄張神事」は、５月５日、９月５日、12 月中旬の土曜日若しくは日曜日に行われている。また、夏至の日には海中に身を浸し、昇る太陽を伏し拝む「夏至祭」が行われている。

立石を現在のように「夫婦岩」と呼び出したのは明治以降に入ってからである。正式には男岩を立石、女岩を根尻岩という。明治 44 年（1911）、皇后の伊勢神宮参拝を記念して発行した『伊勢行啓図会』では、「立石はまた夫婦岩ともいい」とされている。

時代が下り、平成３年（1991）には、全国夫婦岩サミットの第１回会合が二見町で開催されている。「夫婦岩」を持つ全国の自治体と全国夫婦岩サミット連絡協議会を結成し、毎年サミットを開催するとともに、相互に連携して観光客の誘致を図っている。

近代以降の二見浦は、まず明治 15 年（1882）に我が国で始めての海水浴場が開設されたことで知られている。明治 20 年（1887）には、神宮の崇敬団体として設立された「神苑

会」が貴賓の宿泊施設として「賓日館」を建設し、皇族の保養施設として脚光をあびることになった。「賓日館」は明治44年（1911）に二見館に払い下げられ、平成11年（1999）まで、その別館として多くの要人を迎えた。その後、平成15年（2003）に二見町に寄贈され、資料館として一般公開し、大広間などは様々なイベントにも活用されている。平成9年（1997）9月、国の登録文化財となった後、平成16年（2004）3月、三重県の有形文化財に指定された。

「賓日館」周辺の現在の旅館街の新道が整備されたのは、明治38年（1905）のことである。同41年（1908）には電灯がともり、同42年（1909）には電話が開設された。同44年（1911）には国鉄参宮線鉄道が開通し、昭和7年（1932）には音無山にロープウェイが設けられ、観光地としての整備が図られた。音無山には、山頂に日の出遥拝所、観月台、食堂、小動物園が設けられ、カワラ投げのアトラクションなども行われたが、太平洋戦争のため、昭和17年（1942）にロープウェイが供出されたのをはじめ、やがて食堂も閉鎖、動物の檻も撤去されるに至った。時代が下り、平成7年（1995）には遊歩道等が完成し、トイレや休憩所も整備され、四季を通して市民や観光客に親しまれる場所となった。

二見浦への観光は、明治末頃から大正・昭和初期にかけて隆盛期を迎え、その後、修学旅行地としても多くの児童・生徒が全国各地から訪れることになる。昭和35年（1960）には48万人を超す修学旅行生が訪れたが、その年をピークに次第に漸減傾向を強め、平成3年（1991）には約13万人にまで下降してしまった（写真Ⅱ－1・2は戦後の最盛期頃の様子）。

写真Ⅱ－1　旧駅舎前の修学旅行生

写真Ⅱ－2　修学旅行シーズンたけなわ

伊勢志摩国立公園は、戦後初の国立公園として昭和21年（1946）11月に誕生したが、音無山、立石崎より今一色に至る松原及び海岸は、昭和27年（1952）3月に特別地域に指定された。また、昭和54年（1979）には二見町の木が公募され、海岸線に並木として植えられていた「くろまつ」が選ばれた。

近年の事業としては、平成14年度（2002）から開始された街なみ環境整備事業が挙げられる。平成15年度（2003）以降、ＪＲ二見浦駅前から二見興玉神社に至る道路の美装化をはじめ、電柱のカラー柱化及び看板の撤去、賓日館前小公園の整備など、観光産業活性化のための施策を推進してきている。この事業は、平成23年度（2011）の完了を見越して、現在も継続中である。